

Q&A+サマリートーク

コンストラクション：構成する記憶

植村恒一郎+田崎秀一+タナカノリュキ+下條信輔



下條●まずQ&Aに入る前に、後半のフレキシブル・プログラムでフォローしておくべきことをお話します。それは『記憶の迷路』についてなんですが、いささか説明不足になってしまった観があるので、少し説明させてもらいます。あの伝言ゲームというのは、元を質せば記憶の心理学の古典とも言えるパートレットの『リメンバリング』に出てくるデモンストレーションをアレンジしたものなんです。この実験から得られた成果をまとめたのがこのスライドになります。



当たり前ですが、抜け落ちる。それ以外にも付け足される、常識で補う、整頓される、などいろいろあるんですが、面白かったのは携帯電話で実験すると長くなったりもする。そしてこれらを眺めてみると、噂や都市伝説の形成過程のシミュレーションになっているのではないかと印象があります。私のレクチャーの中で、無意識の部分は人々に共有されている部分が多いという話をしましたが、その共有されたフィルターによって取捨選択され変容した結果はみんなに承認されていくのではないかと、というようなことも考えさせられました。

というわけで、Q&Aに行こうと思います。まず、タナカさんの『OUT OF THE PASSAGE』とプログラムのビジュアルについての質問が来ていますが、そのあたりから行きましょう。

タナカ●そうですね、まず『OUT OF THE PASSAGE』についてですが、記憶が編集され物語化されていくという過程があるかと思うんですが、僕が見るかぎり言語的な側面が強い印象があるんですね。それがビジュアルで派生するか、ビジュアルが物語化されるのか、ということをやってみたかったです。ですから、あの爆発のビジュアルには実は意味はほとんどないんです。あるとすればOUT OF STORYがもっとも大きなテーマだったわけです。

下條●ひと目で意味がわかるようじゃあ逆にいけなかった。

タナカ●そうですね。例えば現在のハリウッド映画は僕にとって、最先端のテクニックを駆使して物語をイラスト化しているだ

けにしか見えないという側面があるんです。そうではなくて、1枚の写真や映像から言葉が生まれてくる、そんなクリエイティブがあってもいいだろうと。

下條●そして出てくる言葉はすべてOUT OF になっていて、逆説的な意味で言葉を否定している部分もあったように思います。その意味では、今回のポスターのビジュアルというのも皆さんかなりあわてたと思うのですが、これについてもひと言お願いします。

タナカ●これは4色分解の黒とスミ1色の黒を使い分けているわけですが、同じ黒の向こうにはアカ・キ・アオという3色が隠れているわけです。記憶にもそんな側面があるんじゃないかと。そしてそれが下條さんが言う潜在記憶にリンクするようにも思います。

下條●僕の感想を言うと、これはアクションの引き金を引くデザインだなあと思ったんですね。というのは、下にある矢印をクリックしたくなるし、もしくは黒からはみ出したような黄色や赤をめくってみたいかなと。では、続いて、他の質問に進みたいと思います。田崎先生へ「ピンクと黄色が入れ替わって、パラドックスが存在しなかったという解決部分が早すぎてわからなかった」というものがあったんですが。

田崎●補足してご説明をします。水位の違う2つの無限の海をパイプで繋ぐとします。すると、水は水位の高いほうから低いほうへと流れつづけるわけです。ここで時間を過去に遡るとどうなるかですが、水は低いほうから高いほうへと流れるように思うわけですが、しかし時間を遡るとなると、水の分子の運動も逆転するわけで、結局のところやはり、高いほうから低いほうへと流れるようにしか見えないということになるのです。

下條●やはり田崎先生に鋭い質問が来ていますが、カオス理論とギブス集団を使うと、自由意志が蒸発してしまいそうなきにもそれを救い出せるのではないかと、という質問です。これは植村先生の著書にも関係してくるので、お二人にお願いします。

田崎●確率的なものの考え方をすると自由意志は保たれるだろうという考え方があります。つまり、確率的であるとすれば、過去に起こったことは起こってしましますが、将来については確率は予測できないことですから、どれが起こるか決まっていますから、そこに自由意志が入ってくるという立場ですね。

下條●植村先生はいかがですか。

植村●私はちょっと違っていて、人間の自由意志としてわれわれが理解しているものは、

決定論が確率を使うから救われるというものではないのではないかと思います。自由があるかどうかについてですが、例えば私の右手が拳がっているとすると、同時にはこの右手を挙げないことは出来ないわけです、もう拳がっているから。つまり、本質的な問題は、ある瞬間に、私たちの身体はある状態にあると、だからそうではない状態はとれないという考え方でいい。根本的な背反性とでも言いますが、これはある意味論理的なことだと思えます。右腕が拳がっていることを身体的な機能で科学的に説明したとしても、結局のところ、自由意志を否定しているかどうかは、右手が拳がっていればそれ以外のところには同時には存在しえないんだとわれわれが捉えている、そこに基本があると思うんです。

下條●今、かなりはしょってお話になったと思うのですが、そうすると、例えばこのピンがここにあってあそこにはないというのはピンの自由意志なのでしょう。つまり、私にもピンにも自由意志があるか、私にもピンにも自由意志がないか、のどちらかになってしまおうと思うんですが。

植村●そうですね、一つ重要なことが抜けていました。私の身体というのは私が動かすことができるわけです。この行為というのは非常に特権的な、それこそ世界の中心のような、行為なんだというふうには私は考えているのです。

下條●なるほど。では次に行きましょう。やはり植村先生へですね。「ホビ族の言葉には時制がないそうです。昨日も明日も今の連続と考えているようです。しかし彼らも生まれてやがて死ぬわけで、時間の流れの中で生きているように見える。これは矛盾でしょうか」という質問です。他にも言語絡みの質問が複数ありました。

植村●これは哲学でよく出てくる議論です。言葉における時制の表現というのは、各言語さまざまにあるわけです。そしてホビ族にはそのような時制は確かにないんですね。そこから敷衍して言語によってわれわれ人間の時間意識は決まるんじゃないかという説なんです。私は全然違うと思っています。われわれの言語に時制があるかどうかは別に本質ではないんです。他にもいろいろな表現手段がある。動詞の時制によって決まるとは思っていない。

下條●そうすると、知覚が共通であれば、言語が違って本質的には同じ時間を持つという話になりますが、「今」自体も知覚された時間に私が存在している、もしくは従属していることにはなりません。つまり意識や自分は知覚よりも低い次元に存在するということなのではないでしょうか。

植村●私が言いたかったことは、時制、時間というものを考えたときに、ただ知覚ということになしに、まさに今ここにあるという、この感じですね。もっと普通の言葉で言ってしまうと、自分が生きているんだと。

この生きているという感じが「現在、今」の一番基本にあるということなんです。だからむしろ、知覚が何かを捉えるからといって私が矮小になるのではなくて、われわれにとって一番重要な人間の生命というものが、知覚することで押さえられるということだと考えています。

下條●ちょっと質問の方向を変えますが、お二人に伺います、因果は時間的關係なのか？

田崎●通常物理ですと、因果には時間の軸が最初から入っていますからそう言ってしまうのですが、個人的にはちょっと違うように思います。熱力学では順序だけが出てきますし、運動には時間が表に出てきます。ただ今の物理では時間軸に並べた形で話をしますから、因果は時間的なものと考えていると思いますが、私は分けて考えることも出来ると思います。

下條●田崎先生の2つ目のレクチャーに従うと、実験をする中に過去の要因が未来に影響を与えるという因果関係が前提されていますよね。

田崎●そうですね。そういう実験の制約から順序が決められてしまっているという部分もありますね。

下條●植村先生はいかがですか。

植村●因果を別の言葉で言うと、何かが生み出されることだと私は考えているんですね。ですから、ただ平板にどっちが先かというような議論だけしたのでは因果性の基本が見えてこないと思います。私の考えでは、因果で世界を理解する基礎は、自分の身体を動かすことが出来る、ということだろうと。

下條●それはつまり、動く今を私たちは生の体験としてもっていて、これを世界の時間に投影して考えてしまうという根深い傾向があるのと同様に、因果についても自分が身体を動かしてモノに作用するということが基本にあって、それを拡張することによって物理世界の因果関係を理解しようとしてしまう傾向にある、ということですか。

植村●私はレクチャーの中で光景が流れるという話をしましたが、自分が身体を動かすことと光景の流れは連動しているわけです。ですから客観世界において、身体を動かすことも客観的出来事であって、因果関係と矛盾しないんですね。

下條●タナカさん、何かありますか。

タナカ●例えば静止画と動画というのは物理においては等価なのでしょう。

田崎●物理においても、前が後に関係するということは暗黙に考えているんですね。ですから、存在は永遠に続いているものを見ている。物理において静止画であれば、永遠不変の静止画があるということになり、動画的なファクター、永遠に変わらないものがあつた上での議論になっていると思います。

下條●タナカさん、最近では動画の仕事をよくやってるでしょ。その辺で静止画と動画

はメディアとしてどう違うのか。知覚する側だけでなく、作る側としてどう違うのかという問題意識がタナカさんの中にはあるんじゃないかと思うんですが。

タナカ●動画というのは当り前の状態なので、比較的ゆるいんです。ところが静止画は一種狂気じみたところがあって、かなり精度を上げなくては許されないところがある。テクノロジーが進んだからすべて動画になるというのではなくて、それぞれに感受性の違いみたいなものを持っているような気がするんです。それと動画、静止画それぞれに出てくる記憶に違いがあるんじゃないかというのがありますね。

下條●人間というのは動画の長期記憶を持っていて、世の中がこれほど変わってくると、動画の長期記憶というのがものすごく多くなってきて、われわれの感受性にも影響を与えてるんじゃないかと思うんです。

タナカ●てことは、外部装置が変わることによって、人間の感受性や記憶が変わることなんですか？

下條●ある心理学者が言っていたんですが、人類の心の歴史を記憶装置で分けると4つに分けられて、まず動物的なエピソード、次に文字の発明があり、画像になり、そして現在はビデオやインターネットなど外部記憶装置になると。で、その記憶装置の性質や容量などが人間の心の在り方を決定していくという形で心の進化を捉えることが出来ると言っている、非常に興味深い意見だと思います。

では最後に、フレキシブルプログラムの中に植村さんと田崎さんが対論でタイムマシンの話をしようという企画があつたのですが、その触りだけでもお聞かせください。

田崎●これは植村さんに聞いてみたいと思っていたことなんです。物理にとって時間は流れによって表される。タイムマシンというのは多分、その時間軸に則って議論されていると思うんです。植村さんの話では、「今」にスポットを当てて、基本的に今が存在していて、その今との関係で過去と未来が決まるという論旨だつたと思うのですが、その立場から仮にタイムマシンがあつたら「今」の捉え方はどのように変わるのでしょうか？

植村●タイムマシンの問題は哲学でも盛んになっているんですが、ここではちょっと答えになっていないかもしれないんですが、「今」との関連で話させていただきます。普通タイムマシンという小さな箱か何かに乗っていくような状態が想定されているんですが、その小さな箱が今ここにいる私の現在を運ぶというのは実に奇妙だと思うわけです。何で小さい箱である必要があるのだろう、地球全部、宇宙全体を入れてしまふタイムマシンがあつてもいいじゃないかと。それが私の今なんだと。それにタイムマシンは私が未来に行くというけれども、未来の社会がふっとこっちに來ちゃつたでもい

いわけですよ。そう考えるだけですでにタイムマシンという考え方はかなり疑わしくなってくる、というのが私の考えなんです。下條●ついでにひと言いって、タイムマシンは不純だと思うのは、ほんとに過去に10年遡るとなると、それ以降の記憶を全部消して、10年前の自分とすべて同じにしくちやいけないわけですよ。それが純粋な意味でのタイムマシンということになる。そうなると、何も気づかないはずだ、ということも言えますね。

ほんとに最後ですが、私への質問にも一つ答えさせていただきます。質問は、「創造性のレクチャーに関して、才能と呼ばれるものが記憶の蓄積であると言える根拠はありますか」というものなんですが、言葉足らずだったので手短かに答えますが、もし才能に個人差があるとすれば、記憶の蓄積にあるといたかつたわけではなくて、どういふものが潜在的な記憶に取り込まれているかで個人差がある。これはコントロールできることも環境に影響されてのこともあると思います。潜在的な暗黙の中からは何かを汲み出すことが得意な人がいるとするなら、その人は才能があるということになるのではないかと思います。つまりどういふ態度をとるかで違いがあるのかもしれない。

では、最後にタナカさんに締めの言葉をいただこうと思います。

タナカ●久しぶりに分かんないことが多かつたなと(笑)。そういう意味では、こういう分かんない現場って好きなんです。それは仕事でもそうなんです。分かんない場で五感を研ぎ澄まして何かを得ようとするのがおもしろいですからね。振り方の違いがいろいろあるというのは分かりましたね。

下條●私は最初に、時間という正体不明の怪物があつて、せめてそのわけのわからなさを輪郭を明確にしたいと申し上げたんですが、どうもわけのわからなさが増えたような気がします。それが蓄積となつて皆さんの役に立つというようなことがあれば、成功だつたのだらうと思います。

タナカ●あと、最終的には自分ということですよ、それがおもしろかつたな。

下條●そうですね。全然見掛け上違ふ理論物理学と哲学の方をお招きしたわけですが、自分の分野で扱えないことをはっきりおっしゃつてくださったおかげで、逆説的かもしれませんが、おもしろくかみ合つたように思います。ありがとうございました。そして会場の皆さんにも、このようなタフな議論にお付き合ひいただいたことに感謝いたします。ありがとうございました。